

教訓を風化させてはならない

学長 藤井 昭治

早いもので、あのいまわしい大震災から一年が過ぎました。

あの極限状態から得られた、さまざまな教訓や反省を記し、皆さんに伝えることは体験した者にしかできないことであり、また使命だと思えます。記憶がうすれないうちに、さまざまな思いがつつられたことをほんとうにうれしく思っています。

私たちの貴重な体験や反省は、この文集に書き記すだけでなく、そこから生まれたものを、どのようなかたちであろうと他者へ伝えてゆくことこそ今後課せられた課題ではないでしょうか。

震災で尊い命をなくされた猪木聡子先生、鈴木弘美さんのご冥福を心からお祈りいたします。また不幸にして重傷を負われた松村麻里砂さんの全快を喜ぶとともに、被災された皆さんの一日も早い立ち直りを念じております。

はばたけフェニクス

学校法人理事長 小林 発 巳

阪神・淡路大震災で亡くなられた猪木聡子先生、鈴木弘美さんのご冥福をお祈りしますとともに、被災された皆様および関係の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

大地震から丸一年。未だ未曾有の災害の傷跡はなまなましいものがあります。6,348人もの人が亡くなり、また、多くの人が家屋・財産・健康・職場・コミュニティなどさまざまなものを失ったことを思うと、私も被災したにもかかわらず、自分が今ここに生きてる不思議をつくづく感じます。

この大震災は、豊さと繁栄に浸っていた私たちにとって大変な物理的衝撃であっただけでなく、その価値観をゆるがす精神的衝撃でもありました。自然の前の科学の限界、あまりにも脆弱な政治的・社会的・経済的システムと危機管理の不在を思い知らされました。同時に人の情けをあらためて知りました。

日がたつにつれ、「あの時私は」の話題が数多く、それは悲しく痛ましいものばかりでした。あの不安とパニックとそして破壊の中で、家族、隣人、友人、見知らぬ人達が助け合い、人の命を救った体験と感慨は、私たちの今後の生き方に影響を与えるでありましょう。他者との共生、共働、助け合いこそ真の人間のあり方であると思うからです。

この大震災の体験記録は、今後取り組むべきことの視角とすべきであります。対人関係や対人行動を左右する個人の内的心理過程としての態度と、対人関係のなかで生じる一つのタイプの対人行動としての援助行動に触れた親和生がいました。避難所での観察であり、立派だと思いました。

神戸親和女子大学の皆さん、生命は第一の宝であります。大震災で傷ついた心を癒し、蘇るKOBEと共にごがんばりましょう。

阪神・淡路大震災発生以来、多くの方々にお力添えをいただきました。報道関係の方々、大学周辺の住民の方々、父母の会、大学の修復と清掃に携わってくださった方々、交通回復までのバス運行にご協力くださった方々、ありがとうございました。

編集委員

菅野 圭昭（教員）
坂本 供美（職員）
但尾 哲哉（教員）
松田 誠思（教員）
長谷川貴子（国文学科3年）
安岡 陽子（英文学科3年）
崎山有歌子（英文学科2年）

阪神・淡路大震災の記録

オリオン

1996年3月23日

発行者 神戸親和女子大学

〒651-11
神戸市北区鈴蘭台北町7丁目13番1号
TEL (078) 591-1651(代)
FAX (078) 591-3113

印刷 株式会社七旺社
